Alter
安全な食べものネットワーク オルター
since1976

ほんものをたべよう D

Alter Weekly Order Catalogue

2016.10月2週号

提出日 10/ 火 4 水 5 木 6 金 7
配達日 10/ 火 11 水 12 木 13 金 14
翌々週分配達日 10/ 火 18 水 19 木 20 金 21

オルターの提案

本当に安全な食べものを手渡すために

- ○「だれが・どこで・どのようにつくったか」の情報を日本一公開します。
- ○「国産」「無農薬」にこだわり、日本の伝統食を守ります。
- ○原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物などを徹底的に追放します。
- ○プラスチック容器・レトルト食品を追放します。

野菜 VEGETABLES

有畜複合自給農家として消費者とともに歩んだ40年

北海道で無農薬・無化学肥料栽培。

農村を考える会　渡部 信一

文責　西川 榮郎（NPO 安全な食べものネットワーク オルター 代表）

渡部 信一さん

無農薬でじゃがいも、豆を栽培

北海道上士幌町の、農村を考える会　渡部 信一さんは、46ヘクタールの畑で、緑肥作物をとり入れ、無農薬・無化学肥料による栽培を始めて30年。じゃがいも（男爵・メークイン・マチルダ・キタアカリ）、大豆（音更大振袖、ゆきほまれ）、黒豆（いわいぐろ）、小豆（キタロマン）、うずら豆、福白金時、大正金時、紫花豆、白花豆などをオルターへ届けています。

自給自足が原点

渡部さんは、北海道開拓農家の三代目として1948年に生まれ、小学校の頃から農作業を手伝い、1965年、17歳から経営を任されました。

十勝平野の北部、大雪山の山麓に位置するこの地は、十勝平野の中央部とは違って、年間積算温度も低く、春は遅雪、秋は早霜と、豆類中心の畑作物は３年に一度は冷害で大打撃を受け、多くの農家は次々と離農していった土地柄でした。

渡部さんが農家経営を任される頃までは、電気もなく、燃料は原生林を開拓した畑に残っている柏の大木の切り株を馬で引っ張って掘り起こしたものでした。生活は自給自足でした。

酪農から畑作への転換

経営を任された1965年、畑作から酪農に切り換えるべく乳牛５頭を導入し、その後1995年に酪農をやめた頃は、乳牛200頭の規模になっていました。

酪農をやめた理由は、規模拡大路線の農政下での経営が困難になったという判断でした。以来、野菜、豆類を中心とした畑作経営に転換しました。かつては冷害に悩まされていた地域も、温暖化の影響で総じて栽培しやすい環境に変わってきました。とくに最近５～６年は無農薬でも安定した収穫ができるようになりました。

私たちのロングライフミルク反対運動に呼応してくれたよつ葉牛乳の酪農家

私と渡部さんの出会いは40年前です。私たち四国、関西の消費者運動がロングライフミルク反対、パスチャライズ牛乳実現をめざして、よつ葉牛乳の酪農家にも働きかけていたとき、真っ先に私たちに呼応してくれた酪農家のお一人でした。酪農を良くしていくためには、牧場の土作りが大切、そのためには酪農家も牧草だけでなく、畑作など輪作体系を導入すべきという、今思えばかなり乱暴な私たちの主張に共感し、無農薬のじゃがいも作りにチャレンジしていただいたのです。それが渡部さんの現在の無農薬無化学肥料の畑作のきっかけになりました。

第１便の無農薬のじゃがいもが腐った

この渡部さんのじゃがいもの栽培が、その後の私たちの消費者運動の質を決定する大きな出来事となりました。

私たちが無農薬のじゃがいもを食べたいとお願いし、期待を膨らませて待っていた渡部さんの第１便のじゃがいもが、半分腐った状態で、私が創設した当時の「徳島暮らしをよくする会」に届いたのです。この状況を共有するために、２トン車満載の腐敗臭のする20kg入りの紙袋を、購入された全会員宅へそのまま配達するよう、私は指示をしました。各家庭ですぐに洗って、食べられるじゃがいもをまず助けられるだけ助けてほしい（半分助けられました）、値引きなどの措置は後日、会員に集まっていただき対応を話し合うこととしました。

購入したおよそ100人の会員のうち、約60名が集まって、後日対策会議を開きました。じゃがいもが腐った原因は、前日の雨でまだ畑が湿っていた状態で収穫したこと（共同購入の納品の日程を逆算して、その日に作業するしかなかった）、その湿ったじゃがいもをそのまま畑で20kgの紙袋に詰めてしまったこと（農協に逆らっての無農薬栽培なので、通常の農協の乾燥・選別・箱入れができなかったため）、北海道の９月はもう涼しくなっているが、四国ではまだ夏の季節、そこへホロ車で蒸れた状態で運ばれたこと、また９月収穫のじゃがいもは軟弱な品種「男爵」であったこと、などが確認されました。

この生産者側の手落ちをもし問えば、せっかく無農薬にチャレンジしていただいた気持があっという間に失せ、収入に大きなダメージを与え、渡部さんは歯を食いしばっても、奥様はもう二度と無農薬などには協力しないことになるだろうと考えました。消費者側にとっては、じゃがいもの腐った責任は、もしあるとしても無農薬のじゃがいもを栽培してもらうことがどれだけ生産者に対して栽培から流通までリスキーなことかを知らなかったことぐらいで、もちろんそれが責めを負うほどのことではないことは明らかでした。また産声を上げたばかりの共同購入団体にとっても、その損失を被れる状況ではありませんでした。

じゃがいもは腐ったが、有機農業は腐らせない

この会議の結論は「じゃがいもは腐ったが、有機農業の運動を腐らせないようにしよう」でした。無農薬のじゃがいもを食べたいと思った私たちは、今後このようなミスを決して繰り返さないため、渡部さんの腐ったじゃがいもに対し、「勉強代」としてその損失を各会員が負担することにしました。会議に出席した会員の全会一致の結論でした。会に出席していない会員に対しては、強制できないことですので、各自の自主判断に任せることとしました。結果、約100人の購入者のうち、１人だけが返金を求められました。その理由は「会員外の友人の分も合わせ２袋購入した。私は今回の決定に賛同するが、その友人には十分な説明ができないので、一袋分だけ返金に応じてほしい」ということでした。

有機農産物の流通が商品化した現在ではおよそ考えられないエピソードですが、会員一人一人が自立し、行動するオルターの消費者運動にとって、まさに金字塔というべきエピソードでした。有機農業の運動を守るために、腐ったじゃがいもにお金を払った先輩たちが私たちオルターにはいたということです。いつまでも語り継いでいきたいエピソードだと思います。

渡部さんは無農薬のじゃがいもを初めて私たちに届けてくれた生産者です。以来40年の提携となりました。

その後、渡部さんは町会議員としても北海道農民のために活躍されました。前の奥様が農作業中に事故で亡くなられるという悲しい出来事も乗り越えてこられました。

農民人生はプレッシャーやストレスの連続だったと渡部さんはおっしゃいます。TPP、原発など100年後の日本はどんな国になっているのか、そんな今、農の現場であと３年ほどは自分がやれることを集大成として、四国・関西の産直運動と共有した自給の理念、無農薬栽培の理念に精いっぱい取り組んでいき、あとは後世に託していきたいと語っています。

農村を考える会　渡部 信一さんの 無農薬、無化学肥料の農産物 ☆☆☆

●栽培品目	●栽培品目	●防除	●肥料
じゃがいも（男爵・メークイン・マチルダ・キタアカリ）、大豆（音更大振袖、ゆきほまれ）、黒豆（いわいぐろ）、小豆（キタロマン）、うずら豆、福白金時、大正金時、紫花豆、白花豆	農家の自家採種種子を購入	農薬は使用していません	アミノ酸発酵有機肥料 ‥‥竹酢　中国産 ND　‥‥魚煮汁（ソリブル）　静岡県産 ‥‥廃糖蜜（製糖産業副産物）　北海道産

P2、P5で、農村を考える会　渡部 信一さんのじゃがいも、豆類をご紹介。